平成23年(2011)
阿づまの光
1月号・Januaro

五代教主作「備前耳付水指」

題字 出口直日
通巻　第５０２号
発行　大本東京本部
東京本部長　松田行彦
〒110-0008
東京都台東区池之端 2-1-44
TEL(IP)　050-5510-9502
03-3821-3701
FAX　03-3821-5283
E-mail　tokyohonbu@oomoto.or.jp

## 今月の聖言

地の上の国のことごと愛善の
実行力にみちびき行かむ

出口王仁三郎聖師

# みろくの世成就のための一年に

東京本部長　松田行彦

庚黎明寅年を経て、陽照り輝きだす辛卯を迎えました。大本を基盤として進められてる三千世界の立替え立直しのご神業も、国祖神の大宣言より百十九年目の年となりました。

三千年の永きにわたるお仕組みの実現に、開祖さま、聖師さま、歴代教主・教主補さまのもと、祖父母、両親、子どもと、二代、三代とその遺志を継承し、あるいは自らが因縁の糸に引き寄せられて、ひたすら真心を尽くして奉仕にお仕えくださる大本信徒の皆さまに、改めて満腔の敬意と感謝を捧げ、吾もまたその一人たらんと喜びを胸に新しき年を迎えております。

明治、大正、昭和、を経て平成も二十三年となりましたが、今日このごろの世界は、まさに終末の様相であります。異常気象は日常となり、地球温暖化はアラスカの凍土融雪を招き壊滅も時間の問題となり住民の困窮は想像以上のニュースであります。

昨年を総括して「暑」や「乱」といった漢字で表されましたが、政治経済はもとより、食料不作や悪性疾病の流行、人心の荒廃、憎悪、強欲からの領土問題など、数えれば切りがございません。

世の終末、世の大峠を意識せざるを得ません。人間のみにあらず動物も他のあらゆる生物の生存が困難な時代の真っ中にいる状態です。

このような時代からどんな道筋で万人和楽の世界になるのであろうか、仕上げは神さまのみ業にあるのであり、み教えを信じ教主さまのお導きを素直に従い、各人それぞれの為すべき事に誠心誠意真を尽くす事でありましょう。

正月早々から、型ぐるしい事を書いてしまいましたが、一日も早く来て欲しいみろくの世の願望を成就するための、この一年と思うのであります。

来年の開教百二十年の佳節を迎えるためにも、今年はより一層大事な年になります。

教主さまがご教示くださいました『〇(大和)』の心で参りましょう。

第93回「21世紀、生きがい講座」より

明るく素直に前向きに⑩

# 人生の目的

講師 田辺謙二（たなべけんじ）
（大本 120 年史編纂室長）

## 人とは何か

まず初めに、人とは何なのかということを確認しておきたいと思います。

大本では、人は「神の子、神の宮」であり、神さまの「分霊、分体」と教えられています。

神さまは「全霊、全体」なのです。

例えば、ここに大きなケーキがあるとします。そのケーキを神さまとご理解ください。このケーキ全てが全霊であり、全体です。そして私たちはそのケーキの一部分、小さくても神さまと全く同質のものをいただいているのです。

私たち人は、肉体と霊魂（精霊）から成り立っており、いずれも神さまから授かったものであります。肉体の両親はいますが、広い意味での親は神さまです。したがって人は「神の子、神の宮」なのです。「神の宮」とは、神さまの分霊としての人の精霊が鎮まっている家、容れ物ということです。

私たちの霊魂・精霊が本体で、肉体がその容れ物、容器と教えられています。そういう意味で、人は非常に尊い存在なのです。

## 万物には使命が与えられている

『物にはすべて使命というて、これは何すべきものか、どういう用に立つものか、ということが決まっているものであります』

（『信仰叢話』出口日出麿著）

この世の中に、意味なく存在しているものは何一つないと説かれています。

ここにあるコップは、水を入れて人の口に運ぶという使命があり、水差しは、水を容器にとどめておくという役割があるように、すべて存在するものには、使命、役割があります。

〝毎日掃除しているのに、ゴミや埃がたまらなかったらいいのに〟と思われるかもしれません。ところが、埃はそこが汚れていることを私たちに教える使命、役割があり、そのために存在している。現界に存在するものには、そのもの以外では務まらない使命、役割があるのです。

つい先日のことですが、知人の親族の方が、五十年に及ぶ入院生活の末に亡くなられました。現界的な形だけで見ると、その方の足跡というのは、あまりないかもしれません。自分はこの家を建てたとか、こんな仕事を果たしたという具体的な形は、少ないかもしれません。

しかし、五十年間の闘病生活を送られた方のご用、使命は何もなかったのかというと、その方はその方として、たいへん大きな使命を果たし霊界に帰られているのです。

五十年間の闘病生活に耐えられたこと、またずっと見守ってこられたご家族の心情やご苦労、努力を思った時に、その方が果たされたご用、役割というのは、ものすごいものがあったと拝察されます。

人の使命、役割は、本人でさえ分かりません。しかし各自が大きな使命をいただいて現界に生まれてきていることは確かです。

## 人生の目的は地上天国建設

出口王仁三郎聖師は、

『人生の真目的は地の上に無窮の天国建つるにありけり』

と、私たち人の使命を端的に示されています。

では、人が地の上に限りない、窮まりのない天国をどうすればつくることができるのでしょうか？　次の体験から話しを進めていきます。

私は以前、教団機関誌の編集業務に携わっていました。振り返りますと、本当に有り難い体験を数多くいただきました。

とりわけ三代教主・教主補、四代教主の姿に触れさせていただけたことは生涯の宝です。特に四代教主には、業務を通して毎月のように、直接色々なお話を聞かせていただくことができました。

「女性の化粧や茶髪について」「食生活について」「政治・経済について」「自殺問題について」など、毎回たくさんの質問を用意して、直接話をうかがいました。

ところがある時、四代教主が『尋ねるほうは簡単やけど、答えるのは大変なんやで。今日は私が聞くから、あなた答えなさい』とおっしゃり、『大本は何をするところですか？』と、いきなり尋ねてこられたのです。

こういう場所では分かったような顔をして、「大本は・・・・」とお話しさせていただいてますが、一対一で四代教主から質問をされ、私は笑いで逃げるしかありませんでした。（笑）

すると、四代教主は即座に『大本は改心をするところなんやで』とお答えになり、続けて大本の二大教典の一つ『おほもとしんゆ』に触れ、『「おほもとしんゆ」の中に、何が書いてある？〝改心〟〝改心〟って書いてあるやろ。大本が何をするところなのかと言ったら、大本は〝改心〟をさせていただくところなんやで』と、お話しくださいました。

質問は「大本は何をするところ？」という大本存在の根源にかかわる内容です。それに対する答えが『改心』だったのです。

先ほどからお話させていただいておりますが、大本は全人類だけでなく、動植物も含め、あらゆるものの幸せ、進歩向上、調和を願い祈り、それを実現させていただくのが使命です。それが地上天国・みろくの世の建設であり、悪の世を善に立て替えることなのです。

『改心』とは、悪い心を良い心に変えていくことです。悪い心とは、自分さえ良ければ、自分の家族だけが幸せであれば、自分の国だけが豊かであれば、要するに自分のことしか考えない人、国、組織。あらゆるものをプラス、マイナス、利害で計算して、周りの人の幸

せは一切思わない利己中心的考えが悪い心です。

良い心というのは、みんな一緒に幸せになり、共に向上させていただく。自分の幸せも大事ですが、まず周りの人の幸せを優先し考える。自分の利益よりも、皆が一緒に豊かになり、幸せになっていくことを考える。要するに自分自身の心を悪から善に改めていくことが『改心』です。

そこで大事なことは、「あの人は改心しなければ」「うちの主人は改心が足りない」ではなく、改心の対象は、あくまでも自分自身であり、私たち一人ひとりの改心が、この大宇宙の完成につながっていくと教えられているのです。

大本には『型の出るところ』という教えがあり、大本という一つの集まりが、モデルとして完成していくことによって、それが日本に、世界に広がっていくと説かれています。

では大本とは？　綾部・亀岡の両聖地も大本ですし、この東京本部も大本。各地方機関も。さらには最小の単位である、大本につながっている私たち一人ひとりが大本なのです。この理解がなかったら、『大本は何をする所ですか？』という話にはつながらないのです。

しかし改心は、大本信徒だけに限らず全人類に与えられた課題であり、必須であります。

一人ひとりが自分自身の心を改めること。言葉を変えると、自分の中に天国をつくっていくことです。今の自分が天国的であるかどうか。その一つの物差しとして、日常生活の中に喜びと感謝があるか、充実があるか。この点を自分で確認すれば、自ずと見えてくるでしょう。

それともう一点は、周りの人が自分にどう映っているか。どういうことかと言いますと、周りの人の悪いところばかりが目につくということは、自分自身の中に、天国がない証拠と言えるかもしれません。もし自分自身の心に天国が開けていたら、周りの人のいい所ばかりが感じられる。悪いところがあっても、それに影響されない。これもバロメーターの一つになるように思われます。

回りの人の悪いところばかりが気に掛かり、自分の心にダメージを与えるということは、お互いが持つ悪い想念が共鳴しあって、嫌悪感に、さらに恨みになったりしていると言えるかもしれません。

自分自身の中に天国を築くことにより、それが一つの光となって、周りに広がってゆくと教えられています。自分自身が明るくなくて、周りを明るくすることは出来ません。

今、この部屋が明るいのは、蛍光灯が光を発しているからです。電源を切ると真っ暗です。真っ暗な蛍光灯が周りを明るくすることは出来ないのと同様です。

広げていく順番としては、まず家庭に、そして職場、地域、さらに日本の国に、そして世界へというのが順番です。

## 「自分の心」の立替え立直し

出口直日三代教主は、次のように示されています。

『わたくしたちの神さまへのご用は、それぞれが自分の心を立替え立直しさしていただくことで、それを具体的に、健康の上に、家庭の平和に、社会人としての職務の上に、きずいていって、それぞれ神さまのお蔭をいただいて仕合わせにならしていただくことであるとおもいます』　（『寸用集』巻一）

自分自身の心を立替え立直して、それを形に現していかないといけないのです。具体的には健康の上に、家庭の平和に、社会人としての職務の上に。言葉だけでなく具現していく。

どんなに素晴らしい教えを知っていても、それを実践し、形にしていかないと、そこに進歩向上はなく、何の意味もありません。

## 進歩・向上への要訣は「反省」

先ほど、四代教主は『大本は「改心」をするところ』と示された話をしましたが、三代教主も四代教主も、そして現五代教主も、言葉こそ違いますが、一貫して同じことをお示しになっています。

例えば、三代教主は『脚下照顧』という言葉で、自分の心のありかを、自分の生活のあり方を顧みることの大切さをお示しになりました。

また四代教主は『改心』のほかに『身魂みがき』という言葉で繰り返し説かれました。両者はまったく同じ意味で、自分自身の心、霊魂をきちっと磨くことを意味しています。

ある時、四代教主に「みたまみがきの方法を教えていただけますか？」とストレートに質問しました。すると、『みたまみがきの方法は、反省に始まって反省に終わる、反省を離れて身魂みがきはない』と即答されました。

そして五代教主は『一人一人が岩戸開き』という言葉で、私たちにご教示くださいました。一人ひとりが神さまに向かって心の岩戸を開き、身魂をみがき、改心をさせていただくという意味だと、私は理解させていただいています。

三代、四代、五代と言葉こそ違いますが、そこに流れているものは、皆、まったく同一であります。

## 神さまとのパイプを持つこと

この話を聞かれた皆さまは〝明日から身魂が磨けるぞ！〟〝反省だ！〟と簡単に思われるかもしれません。しかしその反省は、自分の中に勝手に生まれてくるものではありません。

では何によって、自分の中に正しい反省をいただくことができるのか。それにはしっかりと神さまとのパイプ、つながりを持たせていただくことができて、初めて本当の反省がいただけるのです。頭で考えるだけで簡単に生まれてくるものではないようです。

そういう意味で、何が大事なのかと言うと、ものすごく地味なことなのですが、神さまとのパイプを常に持つこと。朝夕拝、神書拝読、与えられた業務への真剣な取り組みを通し、パイプを磨き、詰まらないようにすることが、やはり全ての基本であります。近道も手品もそこにはありません。

まずは自分の中に天国をつくり、それを拡げてゆく。言葉は簡単ですが、これは一生をかけての大事業であり容易なことではありません。

あせらず、休まず、気を抜かず、共に人生の目的完遂に向かって歩ませていただきたいと思います。

# 東光苑月次祭

東光苑月次祭・市杵島姫命例祭は十二月十二日午前十時三十分から、斎主・和田桂一東京本部祭務部長のもと執行され、三百七十五人が参拝した。

祭員は関東教区各主会の青年部員、少年少女祭員は東京主会の貴堂文奎くんと山梨主会の小池翔音くん、伶人は宮咲会関東支部、大本神諭拝読は東京主会青年部の西野文世さんが担当した。

凛々しい青少年部員による祭員奉仕

祭典後、松田東京本部長があいさつに立ち、本年度のご神業の総括と首都圏宣教の第一歩となる〝二十一世紀、生きがい講座〟に一般の方への参加お導きを訴え「大本信徒は神さまとの因縁の身魂であり、立替え立直しのご神業は因縁の身魂である私たちを使って行われると示されています。私たちは身魂を磨き、教主さまの示される大和合しながらご用にお仕えしなければならない」と力説した。

「生きがい講座」にご案内を

祭典後、三階ラウンジでは東京主会直心会による聖地の黒米販売が行われたほか、一階東光庵では村井社中による添釜がかけられ、ロビーでは天声社の神具・書籍類販売と、静岡・麓栄園の愛善酵素農法で栽培されたお茶の販売が行われた。

## 七草粥のご案内

新春の恒例行事となりました「七草粥」の接待を、東京本部を会場に下記の日程で開催します。

春の七草（セリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロ）をやさしく炊きあげ、石川県の山中塗りやつる山みろく村の器に盛りつけた、温かい七草粥をご用意します。

また東光庵での接茶や歴代教主・教主補さまのお作品展示なども実施します。

無病息災と長寿を願う日本の古き良き伝統行事「七草粥」。大本を紹介する好機でもあります。

友人・知人をお誘いの上、ぜひお越しください。

記

日時　平成２３年１月７日（金）

時間　午前１０時３０分～午後３時００分

# 第95回「21世紀、生きがい講座」

第九十五回『二十一世紀、生きがい講座』は十二月十五日午後七時から九時まで、東京本部講座室において、森良秀東京本部次長を講師に「明るく素直に前向きに⑫―現代の大本」と題して開催された。参加者は三十六人（うち、一般十人）。

講座では、大本出現の意義にはじまり、人類愛善運動の歴史とその精神、そして世界平和実現のために現在教団が取り組んでいる各地での歌祭、宗際化活動、世界連邦運動、エスペラントの普及などを紹介。「元の神さまのご意思に叶なう世界平和実現に向けての活動を、大本・人類愛善会はこれからも展開してまいります」と結んだ。

参加者からは、「世界の廃藩置県・世界連邦→世界平和の道…具体的に分かりやすくお話しいただき、大本の目指すところ、願いが、より良く理解できた（五十九歳・男性・一般）」「大本が目指す世界（世のあり方）と、実現のための人類愛善運動を知ることができ、自らの深い反省と、これからの自己の取り組みについて考えるきっかけをいただいた（四十三歳・男性・一般）」「〝お互いさま〟の気持ちを大切に日々の生活を過ごしたい（五十三歳・女性・信徒）」などの声が寄せられた。

「お互いさま」の気持ちを大切に

## 東光苑祭典・行事紹介

**平成23年1月**

**新年祭**
1日（土）午前7時

**年賀交換**
1日（土）新年祭後～午後5時
2日（日）午前9時～午後4時
3日（月）　〃

**七草粥**
7日（金）午前10時半～午後3時

**東光苑月次祭・成人式式典**
9日（日）午前10時半

**聖師毎年祭（63年）**
19日（水）午前10時半

**第96回「21世紀、生きがい講座」**
講題　生活と信仰
講師　椎野恭三（関東教区特派宣伝使）
19日（水）午後7時～9時

**2月**

**節分大祭遥拝祭**
**二代教主・四代教主聖誕祭**
3日（木）午後6時半

**東光苑月次祭・豊年祈願祭・市杵島姫命例祭**
13日（日）午前10時半

**第97回「21世紀、生きがい講座」**
15日（水）午後7時～9時
講題　深海から見た地球、そして生命
講師　田中武男（理学博士）

**教本3級認定講習会**
26日（土）27日（日）